

# 2016 年度 第2回スピリチュアルケア研究講演会 報告



会場内の様子と窪寺俊之先生

聖学院大学総合研究所の主催する、2016年度スピリチュアルケア研究講演会第2回が、2017年1月20日（金）に、講師に窪寺俊之氏（聖学院大学客員教授）を迎えて、聖学院大学ヴェリタス館教授会室にて、57名の参加の中で開催された。この研究講演会は、本年度の基調テーマを、『人生の終幕への寄り添いを考える～かけがえのない人生への伴走と分かち合いのケア～』と設定し、第1回は、2016年10月に佐々木炎氏により「認知症の人と介護者へのスピリチュアルケア」の講演が行われている。

第2回の今回、窪寺氏は「病いを生きる人へのスピリチュアルケア」の論題のもと、窪寺氏が、牧師として終末期にある患者と関わってきたことによる知見と体験から、死の意味をとらえ、一回限りの人生の終わりに自己の生を肯定できるケアのありかたと役割について論じた。医学・医療の急速な進歩に対し、疾患には対応できても精神的存在である人間に向き合えない現状を窪寺氏は「高齢者で慢性疾患患者に心蘇生法をもちいること」を例として説明し、疾患のみでなく全人的存在に

向き合う必要性を強調した。そこに欠かせないのは「自己の意思表示」と「生命の質についての認識」であり、これらを担うものとしてのスピリチュアリティの重要性が指摘された。

窪寺氏はスピリチュアリティの特徴を、いのちを支え、人生を意味付け、回復と赦しをもたらすものと説明し、危機（病、老、愛する者との死別、挫折など）における、自己コントロールの不可能な状況における覚醒を契機としてあげた。このように説明されるスピリチュアリティは宗教に近いが宗派には限定されない根底的なものとして認識され、スピリチュアリティは、有限な存在としての自己を、「2つの極」、すなわち、超越的な外的他者と、究極的な内的自己とが包み込む垂直関係として描かれる、と窪寺氏はまとめた。

では、スピリチュアルケアの実際においては何が整えられなければならないか、このことについて窪寺氏は「傾聴＝スピリチュアルな苦痛を聴く」ことの重要性を指摘した。すなわち、個人の物語を聞き、心のメッセージを聴くことから、「きく」ことの重層性（聞く・聴く・訊く・利く・効く）が統合され、それによって、苦のうちにある有限な自己が「信－なにを頼りとしているか、望－なにを根拠としているか、愛－なにを大切にしているか」を理解し、そのさきにある「法」＝いのちの法則を見出す、この過程を説明し、あわせて、スピリチュアリティを育くむための要素として「宗教的スピリチュアリティ、自然的スピリチュアリティ、文化的スピリチュアリティ、民俗・風習的スピリチュアリティ」をあげ、また、スピリチュアルケアラーの資質として、「優しさ・思いやり、共感性、信じる心」を指摘して講演をしめくくった。

質疑応答では、生きることを拒否するケースへの対処、現代において存在そのものを認める共同体の創生は可能か、などが問われ、窪寺氏からは、本人の意思をしっかりと聞き取るための時間確保の重要性（あわせて、本当の問題にふれずに終わっ

てしまうことへの心配)が指摘されるとともに、スピリチュアルケアは個人の問題にとどまらず、共同体(絆)の回復の面をも持つこと、すなわち、ひとりひとりだけではなく、みんなが生まれ、生きて来てよかった、と思える支援を考え合うことから、スピリチュアリティを通じてヨコの関係も再生される、と応じた。すなわち、存在そのものを大切にしようことから、そこにおいてひきだされてくるはたらきや、はたらきあいのあることを思い描くことを大切にしなければならない、ということである。

今回の講演は窪寺氏の豊かな経験に裏付けられたところの、聴衆ひとり一人に自己のうちにあるスピリチュアリティをみつめさせるかたりかけに満ちたものであった。

(文責：小野 久志 [おの・ひさし] 聖学院大学  
大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後  
期課程)